

ラオスにおけるメコン住血吸虫症の現況

中村 哲¹ 松田 肇² 桐木 雅史² 波部 重久³ KITIKOON VIROJ⁴ 渡部 徹⁵ 二瓶 直子⁶
PHROMMALA SOURAXAY⁷ BOUNGNONG BOUPHA⁷ NAO BOUTTA⁸

国立国際医療センター 研究所¹ 獨協医科大学 医学部 熱帯病寄生虫学講座²

福岡大学 医学部 実験動物センター・寄生虫学講座³

Department of Social and Environmental Medicine,

School of Tropical Medicine, Mahidol University.⁴

東北大学大学院 工学研究科 土木工学専攻環境水質工学講座⁵ 国立感染症研究所 昆虫医科学部⁶

National Institute of Public Health, Ministry of Health.⁷ Cabinet, Ministry of Health.⁸

メコン住血吸虫症はメコン流域のラオスとカンボジア国境域に集中して見られる特異な疾患である。特にラオスにおいては1990年代に十分なコントロールがなされてきた。しかし、2003年5月に同国政府とWHOとがチャンパサック県内約60村落で実施した調査では、虫卵検査の有病率が最も高率の集落で47%と再流行の傾向が示された。本研究は現地調査を通じて同疾患の流行要因を解明し、その防疫にかかわる提言を行なうことを目的としている。今回は本年3月に実施した予備調査結果について報告する。

調査地：ラオス政府とWHOが高率のメコン住血吸虫感染を確認し、集団駆虫をしたとされるチャンパサック県コーン郡内5カ村 (Thamakheb, Thakham, Khorn Thai, Khorn Neua, Hat Xaykhoun) および未調査の2カ村(Long Kham, Long Song)を対象とした。

方法：住民糞便および動物糞便検体についてフォルマリンデタージェント法による虫卵検査を実施した。また、同郡内メコン流域においてメコン住血吸虫の中間宿主となる貝(*Neotricula aperta*)の採取を行った。

結果と考察：7カ村の住民(総人口4397)から426の便検体を得た。前年調査された5カ村では1050%と高率にメコン住血吸虫虫卵を検出した。その前年の調査結果(未発表データ)と今回の結果との比較からは、Thamakheb村を除く全てで検出率が増加していた。このことは駆虫の効果が認められないばかりでなく、WHOが勧奨するKato-Katz法に比べ今回用いた集卵法の検出力が高いことも理由として考えられる。また未調査2村落でも28%および20%とその虫卵検出率が高いことを確認した。さらにLong Kham村では重症患者を確認した。年齢別虫卵保有率は5歳から14歳の小児が最も高く4割から6割に達した。動物糞便は豚について19検体得たが、メコン住血吸虫虫卵は検出できなかった。今後は調査例数を増やすと同時に調査動物種を広げることで対処したい。メコン住血吸虫媒介貝はアルファ型、ガンマ型の生育を調査域内で確認した。これらの個体群は北部に比し南部で大きく、地域による生育差があることが判明した。コーン郡内の人々は数多くの島に分散して居住している。ラオス国の保健行政対応はもとより観光政策の観点からも本住血吸虫症へ早急な対策が望まれる。この対策は現在住血吸虫患者が減少しつつあるメコン下流域隣国のカンボジア政府との密接な協議の上で実施されることが望ましい。

Current epidemic state of schistosomiasis mekongi in Lao PDR.

SATOSHI NAKAMURA

Research Institute, International Medical Centre of Japan, Tokyo, Japan

